

保育の「ビデオ観察」雑感

佐伯 胖

最近、ビデオによる保育園や幼稚園の幼児の行動観察がさかんになってきた。このこと自体は大いに結構なことなのだが、どんな方法にもそれなりの制約と限界があるので、注意を要する。

まず第一に、観察の「切り取り」効果であ

る。保育者にしろ、園児にしろ、常に過去から現在、未来への「流れ」の中に生きている。なにげない動作が、数時間前、あるいは数日前、あるいは数年前の「あのこと」との関連で意味づけられていたり、あるいは、「あとであれをしよう」という心づもりのもとでの、ほんの暫

「何か」が鮮明に映し出されている場合もある。また、ふだんの保育活動のなかではとても目が行き届かないさまざまなことからの相互関係が、ビデオで見ているはじめて歴然と見えてくることもある。そして何よりも、保育者が、「自分をみる」ことの重要性を強調しておきたい。保育活動の現場では、ついつい「あの子」を見たり、「あのこと」に気を配ったりしているが、そういう「自分」が、子どもにとってどう見えているのかを、「子どもになったつもりで」見るということは、是非とも実践していただきたい。

さて、ビデオ記録を撮影する際に、是非とも注意していただきたいことがある。それは、撮影者は、できるかぎり「フィールドノート」をきちんとしてくれる、ということである。とくに、子どもがあのととき何を言っていたのか、どの子

どもがどの子どもに何をやっていたのか、などなどは、あとでビデオを見ただけではわからないことが結構多い。そのために何でもそのとき気づいたことはどんだんノートに記載しておくことである（ノートはその場で書く場合もあるが、その日のうちにビデオ再生しながら想起しつつ書きとめてもよい）。

また、ビデオ記録にあたっては、つねに「関係」を記録するように努めてほしい。特定の子どもに焦点を当てて「その子どもが何をするか」を詳細に記録するというよりも、「その子どもの行動に関係している他者、他の出来事」を記録する、という心づもりで記録してほしい。とくに、他の園児とかかわり、あるいは特定の「集団」とのかかわり、などなどである。したがって、近距離で「表情がわかる」ようにクローズアップで撮るばかりではなく、遠くか

ら、周囲の状況を視野に入れて撮ることもきわめて重要である。

もう一つは、極力「一部始終」を記録する、ということである。やたらにあれこれのシーンを断片的に記録するのではなく、コレと思ったところでは、カメラを動かさずに、じっくり撮り続けるということである（幼稚園などでのきごとの「一部始終」というのは、案外長い時間を意味していることがあるので注意）。

なにしろコトが起ってからでは遅い。何かが起こりそうだという直感が働いたら、むだになってもよいから、どっしりとカメラを据えて、あとは何事が起こっても（文字どおりの

「危険」な事態が発生しないかぎり）ただ平然とテープを回し続けることである。よくある「けんか」や小さな「事故」（モノを落としたりとか、壊したとか）ぐらいで動揺してはならない。あくまで無干渉で、子どもたち自身でどう対処するかの一部始終をしっかりと撮り続けるのは、かなりの「自制」の努力が必要だろう。しかし、そういう場合の記録こそが貴重な記録になり、冷静で落ちついた目で保育を見ることを支援してくれるのである。

（東京大学教育学部）